

加工用トマトの早期増収対策

1. 試験のねらい

加工用トマトは、輸入自由化品目の一つであり、ジュース以外の加工品は国内産より国外産が有利な現状となっている。一方、ジュース用についても加工メーカーサイドで品質面から、利用期間が限定されており、県北を中心とした産地では出荷期間の拡大が望まれている。そこで、早期からの出荷による、有利販売期間の増収技術対策について検討を行った。

2. 試験方法

供試品種はカゴメ77とし、播種後12cmポリポットに移植、育苗した。栽植距離は畝間180cm、株間50cmを標準とした。処理は、播種期・摘心育苗及び栽植密度について検討した。また、定植時期とべたがけ資材の利用についても検討した。

3. 試験結果及び考察

- (1) 5月10日定植時の苗の状態について表-1に示した。3月4日播種の苗のステージは、慣行区が主枝第3花房開花直前で、3本仕立て区では、側枝第2花房の開花直前であり、6本仕立て区は、開花前であった。また、3月17日播種では、慣行区で主枝第1花房3花咲きでその他の区は未開花であった。
- (2) 収穫は、4日播種で7月6日から全区が、17日播種では、7月13日から慣行区と3本仕立て区が、6本仕立て区は7月27日からとなった。収量は、播種期系列では、3月4日播種の方が17日播種より20%程度多くなった。仕立て系列では、4日播種で6本仕立て区が最も多く、次いで3本仕立て区となったが、17日播種では慣行区が最も多かった。一果重は、全区とも17日播種の方が10%程度重くなった。また、株当たり着果数は、4日播種の方が慣行区で約20%、摘心区で約50%多くなった。
- (3) 図-1に栽植本数別収量と一果重を示したが、収量は栽植本数の多い区が多くなり、一果重は、栽植本数の少ない方が重くなった。
- (4) 図-2に定植期別のべたがけ資材利用による7月の収量を示した。定植期系列では、4月25日定植が、5月11日定植に比べ約50%多収となった。べたがけ資材の利用では、5月11日定植では、ほとんど差がないが、4月25日定植では、浮きがけが70%程度多収となり、効果が認められた。

4. 成果の要約

加工用トマトの早期増収対策として、可能な限り早く播種し、苗床で摘心して側枝の発生を促し、密植するとともに、べたがけ資材の浮きがけにより早期定植を行うことが有効と考えられた。

(担当者 野菜部 本島俊明)

表-1 定植時の苗の状態

播種期	苗の仕立て方	※ 草丈 (cm)	茎 径 (mm)	側枝長 (cm)	ス テ ー ジ	※ 慣 行	摘心せず
3/4	慣 行	45.8	7.1	7.2	第3花房開花直前	3-3	本葉3枚上摘心
	3-3	34.3	8.0	25.6	側枝第2花房開花直前	6-3	3本仕立て
	6-3	24.9	7.7	13.8	側枝第1花房1花咲	6-3	本葉6枚上摘心
	6-6	37.4	7.6	12.4	側枝第1花房開花直前	6-6	3本仕立て
3/17	慣 行	34.3	6.2	—	第1花房3花咲	6-6	本葉6枚上摘心
	3-3	22.1	7.1	12.4	未 開 花		6本仕立て
	6-3	25.4	6.5	1.7	未 開 花		
	6-6	24.6	6.4	1.3	未 開 花		

表-2 播種期と苗の仕立て方が収量に及ぼす影響

播種期	苗の仕立て方	可販果重 (kg/a)				一果重 (g)	株当り 着果数	不良果 (%)	株当り 残果数
		7 月	8 月	9 月	計				
3/4	慣 行	257.2	355.7	10.6	623.5	78.9	69.8	15.9	1.3
	3-3	309.8	415.1	5.6	730.5	81.1	77.3	14.4	1.6
	6-3	204.9	549.2	9.0	763.1	87.3	69.8	12.4	1.8
	6-6	348.3	423.5	7.8	779.6	78.1	77.6	12.2	1.6
3/17	慣 行	141.7	418.0	73.2	632.9	87.9	58.7	13.5	1.3
	3-3	211.8	351.0	14.1	576.9	96.1	48.3	12.0	1.1
	6-3	16.3	469.3	40.4	526.0	91.9	45.3	9.5	1.1
	6-6	60.5	509.6	29.4	599.5	88.9	51.2	8.1	0.9

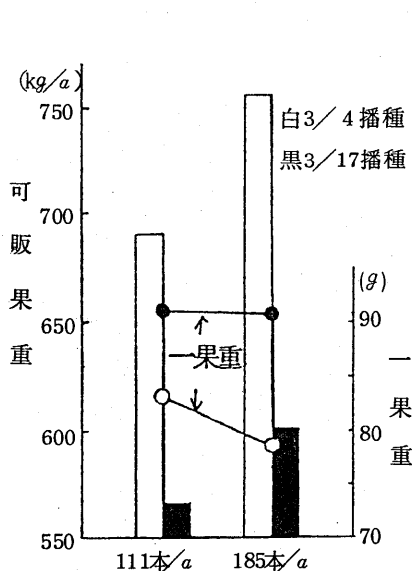


図-1 栽植本数別収量及び一果重

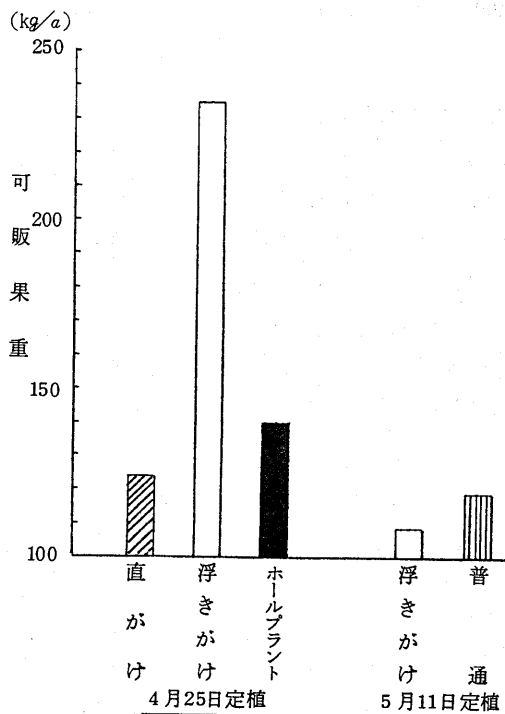


図-2 定植期別べたがけ資材利用による7月収量